

パネル

現在は文部省の管轄にある。

三 公認(宗)教制と宗教教育

このように公教育において多様な宗教教育が可能となる制度的背景としては、第一に、厳格な政教分離制ほど国家と宗教団体の関係は分離されていないが、国教制のように一つの特定の宗教(団体)を公認するのではなく、特定の複数の宗教(団体)を公法人などとして公認し国家が支援や監督や協働を行うといった、公認(宗)教制をタイが採用しているという点である。タイでは仏教(上座仏教、華人系・ベトナム系大乘仏教)、イスラーム、キリスト教、バラモン・ヒンドゥー教、シーク教の特定団体が公認されている。

第二に公教育における宗教教育や道徳教育への参入という点では、公認された諸宗教(団体)は、優遇措置を与えられていることが多いという点である。タイの場合この点は法的に明記されている。

第三に、公認の宗教団体やその関連団体は、省庁や地方公共団体の一部ではないもの、行政ネットワークに組み込まれたグレーゾーン組織と同等の位置づけを有している。

第四に、宗教教育を行いやすくする制度的仕掛けとして、公認(宗)教制の枠組みや、宗教人口統計および国民携帯証のような制度を通じて、宗教帰属意識とともに、帰属するべき宗教カテゴリーをも国家が水路付け、宗派性を縮減している。

四 まとめ

以上のようにタイでは公認(宗)教制を背景に、諸制度の連関に支えられつつ、宗教団体とりわけ上座仏教が公教育の一部に

関わっている。そしてその教育活動も多岐にわたる。

なお、これらの点について、厳格な政教分離を重視しない宗教制度の存在を日本のような国においてどのような立場から提示するのかといった点や、宗派性の縮減による、コミュニケーションな帰属意識を強化の問題なども指摘できよう。

高校の教科書に見られる「仏教」について

江田 昭道

教育基本法第一五条第二項では、「国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない」と定められているが、このことは、個々の宗教に関する事柄が公立学校で全く扱われていないということの意味するのではない。中学の「日本史」や高校の「倫理」「日本史(A/B)」「世界史(A/B)」などでは、宗教に関する具体的な事柄が扱われている。

宗教に関する事柄を扱う科目の内、もっとも詳しく「仏教」を取り扱うのが、科目「倫理」である。「倫理」は選択科目であるが、時事通信社の調査によれば、この約二五年間で一千万冊以上もの教科書が採択されており、決してマイナーな存在ではない。

「倫理」の授業で中心的な位置を占めるのが教科書である。また、この教科書の記述は、生徒から「真実」として見なされ

る可能性が高いだけでなく、「文部科学省検定済」というお墨付きにより、「学校教科書」という枠組みを超え、公的な認識として扱われる。科目「倫理」について考える際、「倫理」教科書の記述の検証は不可欠である。

この「倫理」教科書の記述に大きな影響を与えているのが、『学習指導要領』ならびにその解説書『学習指導要領解説 公民編』である。その影響力の大きさは、ほとんどの「倫理」教科書が、『学習指導要領』の提示する項目立てに沿った構成を取っていることなどから窺える。『学習指導要領』では、インド仏教と日本仏教は、それぞれ異なる項目で取り扱われているが、それら個々の項目には、別々の「ねらい」が設定されている。それぞれの項目の「ねらい」を対比すると、『学習指導要領』は、インド仏教を教える項目について、一人の「人間」としての在り方生き方を考えさせることを目的として設定する一方、日本仏教を教える項目については、国際社会に生きる「日本人」としての在り方生き方を考えさせることを目的として設定している。

『学習指導要領解説 公民編』は、インド仏教・日本仏教を教えることについて、『学習指導要領』よりも具体的な解説を加えている。各々についての解説を対比すると、インド仏教を教えることに関しては釈尊の言行、すなわち仏教の「原初」の姿が強調されているのに対し、日本仏教を教えることに関しては「日本独自」の仏教受容に重点が置かれていることが分かる。これら二点を強調することは、「仏教」について、分裂したイメージを生徒に与えかねない。

教科書の記述については、二つの大きな問題点が挙げられる。一つ目は、教科書の記述そのものに誤りが散見されるという問題である。例えば、梅原猛氏の造語である「山川草木悉皆成仏」が最澄の言葉として紹介されていることや、「自力本願」という用語が用いられていることなどが挙げられる。二つ目は、教科書が、日本仏教の各宗派を、宗教ではなく、日本思想史あるいは文化史の一要素として扱う結果、発展史的な見方から、それぞれの宗派を序列化する立場に陥りやすいという問題である。例えば、一部の教科書は、鎌倉期の祖師たちによって、仏教の「日本独自の受容」が完成したという立場にたっているため、奈良・平安期の仏教を低く位置づけるかのような記述が見られる。また、鎌倉期までの祖師たちによる仏教の受容を重視して教える立場は、結果として、それ以後の日本仏教を軽視する態度でもあることにも注意が必要であろう。

「心のノート」の可能性と限界

——官製スピリチュアルのほころび——

弓山達也

二〇〇二年、文科省より「心のノート」と呼ばれるワークブックが全国の小中学校に配布された。この「心のノート」には、既成の道徳副読本と比べて「自己」「他者」「自然・崇高さ」「集団・社会」に関する踏み込んだ記述が散見され、一部は宗